都道府県別賞一等

# 見えない優しさと生命保険

岡山県　岡山市立桑田中学校　一学年

岡﨑　裕清

「生命保険」と聞くとお金の話に思えるけれど、実は家族を思う〝見えない優しさ〟であることに気づいた。

ある日夕食後、リビングのテレビを眺めていた時のことだ。画面の向こうでは、突然の病気や事故に備える生命保険のＣＭが流れていた。僕は何気なく、「お父さん、お母さんもこういう保険に入ってるの？」と聞いてみた。すると親は少し照れくさそうに、「入っているよ。あなたが大人になるまでに、もしものことがあっても困らないようにね。」とお茶を飲みながら静かに答えた。その言葉を聞いた瞬間、胸の奥がじんわり温かくなった。普段の生活の中で、親が自分のために保険料を支払っている姿は見ることはない。それは家計簿の中の数字であり、目には見えないものだ。しかし、その見えないお金の向こう側には、『何があってもこの子を守る』という親の優しさが詰まっていることを感じ、僕は親が自分を守ってくれる安心感を覚えた。

今まで僕は、目に見えるものばかりに価値を感じていた。現金、人、携帯、友達関係やテストの点数など、形があるものや直接見えるものばかりに気をとられていた。しかし他にも目に見えない優しさがたくさんあるのではないだろうか。

たとえば、親が何も言わずに毎月お金を払ってくれている生命保険の保険料もそうだし、当たり前のように整備されている学校の校舎や校庭、安全に暮らせるように整えられた街のルールもそうだ。誰かが誰かを想い準備してくれた〝見えない優しさ〟のおかげで、僕は今、こうして安心して学校に通い、勉強したり、友達と楽しく笑い合うことができているのだ。

生命保険という、一見すると難しくて自分には関係なさそうな言葉だったけれど、その裏には僕を心配してくれる親の気持ちがちゃんと隠されていた。普段はうるさいことばかり言ってくる親だけれど、見えないところで僕のために準備をしてくれていたんだと思うと、感謝の気持ちがわいてきた。

僕はまだ中学生だから、誰かのために保険に入ったりはできない。だけど、落とし物を届けたり、家の掃除を手伝ったり、落ち込んでいる友達に声をかけたりと、自分にできる小さな優しさを周りに届けることはできるはずだ。そして、いつか大人になったとき、僕も誰かを守れるような人になりたい。